

養老

むかし

話



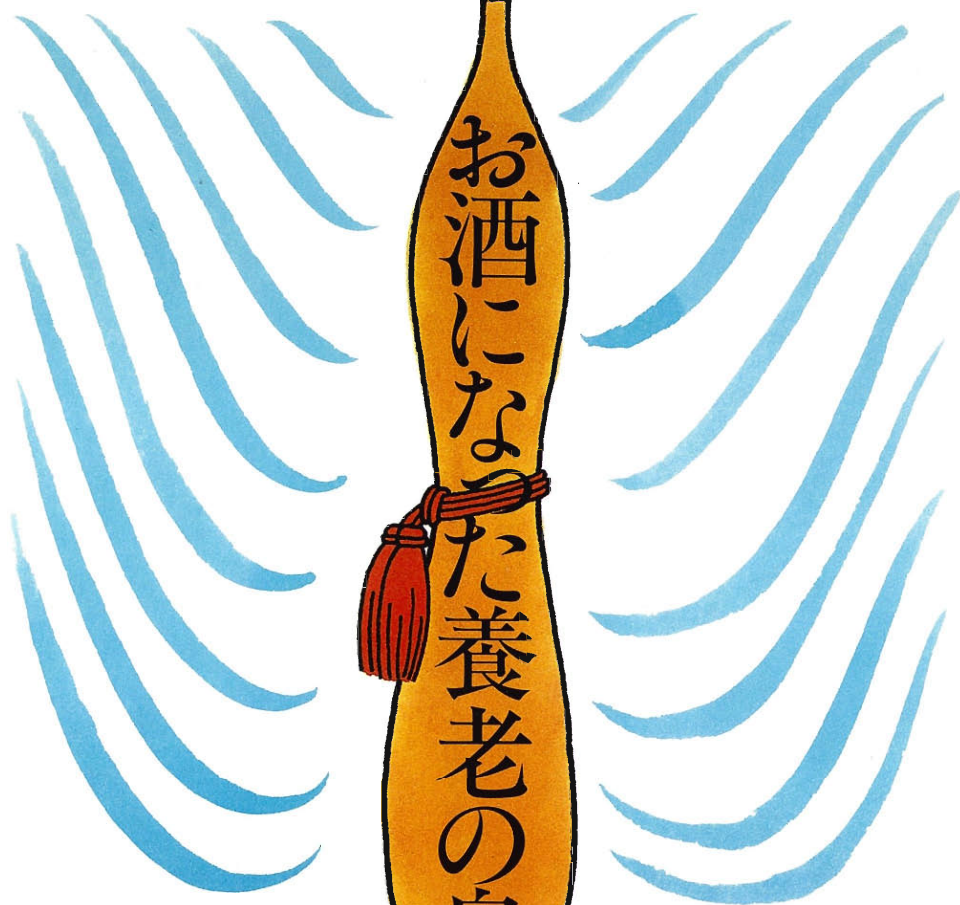


養老むかし話

目次——養老むかし話

● お酒になった養老の泉……………	1
● 直江の地蔵さま……………	8
● 久々美雄彦神社……………	10
● 小栗栖神社……………	12
● 石仏……………	14
● 専念寺……………	17
● 山猫のお六……………	19
● しぶなしがや……………	22
● 八百比丘尼と 勢至の立岩……………	27

● 姥切石……………	30
● 勢至の一つ火……………	32
● 柏尾の観音……………	34
● 柏尾の金鶏……………	37
● 小畑の千人塚……………	40
● 逆さあし……………	43
● 船附みなと……………	46
● 多岐神社……………	48
● 薩摩義士の宝暦治水……………	50



お酒になった養老の泉

むかし、むかしの話や。そーやなあ、千二百年もむかしの話や。

多度山とどやまのふもとに若い男と年としよりのおつ父とさんとふたりぎしで住んじよった。

若い男の名は源丞内げんじょうないといった。大変、

びんぼうやったが、とつてもええ男やった。とつても、働はたらきもんで、朝、早はやうから、晩、おそーまで、働はたらいとつた。山

へ行いつては、たきを拾ひろつて、それを米やなんかと、かえことしとつたんやて。

おつ父さんは、まあーだいぶ年やし、病やま気でな、目はあんましよおー見えん、まあちいとは見えただけどもな。足も弱よわてほとんど歩あるけんのやわ。

そんなおつ父さんに、源丞内はようつかえとつた。おつ父さんの楽しみは、晩に飲む少しの酒なんや。この酒をふくべに入れて買かつてくるんが、源丞内の楽し

みでもあつたんや。なんしょ、おつ父さんが子供のようによろこばつせるもんやで、どうぞして酒を買つて帰らんと、と思つて、いっしょうけんめい、たきぎをひろうとつたんや。そんな源丞内^{げんじやうない}におつ父さんは、

「すまんこつちやーなあー、お前。いつも苦労かけて」

と言わせるんや。すると息子は

「何、言つちよるんや、水くしやあわ」と言つて、毎日働らあとつた。

ここらへんの山は夏はあつついし、冬は、さぶいし、そらまあ、なんぎなもんや。ちよつと山んなか、ひやあると、昼^{ひる}でもまっ暗やで、おそぎやあもんや。そんでもいっしょうけんめえ源丞内は、働いちよつた。

そんでもな、いっつもうみやあちよう

しに、お酒が買えるとは限らんかった。いや、買えん日がつづくようになったんや。

ある日のことや、つかれた源丞内は、山のふもとで腰掛^{こしか}けていっぶくしとつた。ほーしてお滝を見ながらこんなこと考えちよつたんや。

『あの滝が、お酒やつたらなあ、おつ父さん、よろこばつせるになあー。それにしても、今日もお酒が買ってけなんだなあ』

疲れきつてまつて、ぼさーとしちよつたんやろなも。ふらふらと歩いちよつたにちぎやあねえ、つるつとすべつてまつたんやわ。なにしろ、苔がいつびやあついとる岩だで、よっぱど氣いつけんのだちかんのに。源丞内は、そのまんま、すべつて岩のあいさをすべつてつて、ど

しーんと落つてまつて、氣いうしなわしてまつた。

そうしちよるまに夜になつてまつた。

源丞内は、夢見ちよるような氣もちやつたが、だんだん氣がついてきた。耳の遠くのほうでは、お滝の落ちる音がするし、川のせせらぎも聞えてくる。ほーして、不思議なかざがしてくるんや。甘いような。こうばしいような。いったいなんやしゃん。そう思うてあたりを見わしたたんや。

そうするときが、少し横ちよのところに、こんこんと泉がわき出ちよるんや。どーも、この良いかざは、ここからしてくるらしい。おそが、おそが、寄つてみると、たしかに、良いかざがしてくるの、ここからや。

そばまで近づいてみると、このかざは、

お酒のかざのようにちよる。

『まさかお酒がこんなところからわき出てくるわけあらへん』

と思ひながらも、源丞内は、両手でくんでみて少しなめてみたんや。

「これは、うみやあ！」

ほんとーうに、びっくりしてまつて、腰、ぬかさんばっかりやつた。

源丞内は、お酒は飲んだことあらへんだけど、これはまちがいなくじょうとうのものやとわかった。ふくべにつめて、ちやつと家へと急いだ。

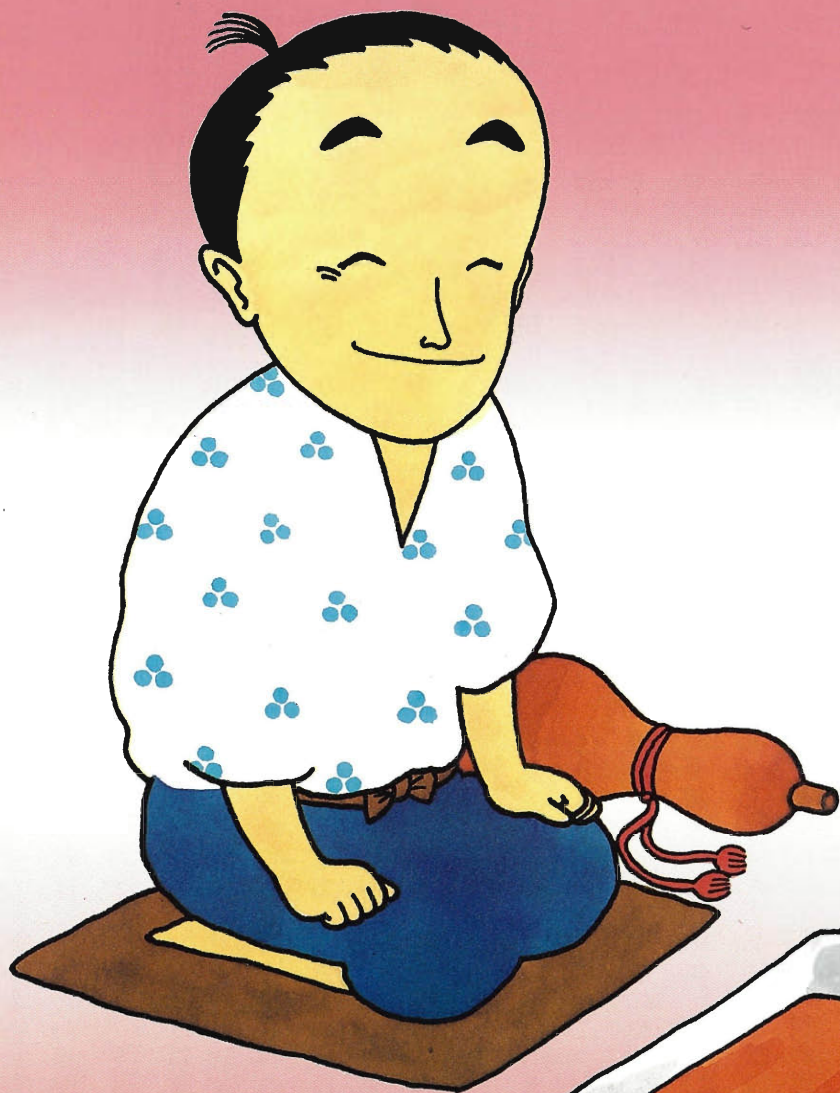
家へ歸つて、この話をする、おつ父さんは

「そんな、たわけたことがあらずか、夢、みちよつたんやあらへんか？」

といつて、ふくべをかたむけて茶わんにくんだ。ほうして飲んでみるとさいが…。

「うみゃあ！これは、まさしく酒や。こ
んなうみゃあ酒、のんだことがにゃあ」
といって、大よろこびや。





そんなことがあつてから源丞内は、い
つもその水をくんで歸つた。

そうして、おつ父さんに飲ませて、自
分も少し飲んだ。二人は、いっつも楽し
そうに笑いあい、今までより、まっとま
つと仲ようくらしちよつた。

そのうち、不思議なことが、おこつた
んや。あんなに元気がなかつたおつ父さ
んが、だんだん元気になつたんや。
前は、足が弱て歩けんかつたけど歩ける
ようになりんさつた。背中も曲がつちよ
つたけど、ぴーんとしやした。目もしよ
ぼしよぼしてよー見えんかつたはずやつ
たのに、よう山を歩いちよらつせるよう
にならした。

「こりやあ、ありがたいこつちやなも。
ちゃんと目も見えるし、歩けるようにな
つたし、きつとあのお酒のおかげや」

とおつ父さんがいうと源丞内は

「そうやな、水がお酒になるのもへん
やし、あれは、きつと神様が与えてくん
さつたありがたい水や、そまつにすると
バチが当たるわなも」

といったんや。そうやって二人は、お
酒を大切にし、毎晩少しづつ飲んだんや。
ようみるとおつ父さんの顔はつやつやし
とるし、あんなに、まっ白やつた頭も黒
うなつてまつとる。ほんにありがたいお
酒や。

まあ、こんなええ話は、人に伝わるの
は早いわなも。あつちこつちの人んたが、
源丞内のとこへ聞きにやつてくる。

正直もんの二人は、別にひとりじめす
ることのう、みんなに教えてやつたんや。
そんなもんで、この村の近くには、病
人はおらんようになってまつた。



こんな話は奈良の都の帝のときまでと
どいた。そうして、ついに帝は、何人も
の家臣とともに、何日かかけて、たしか
めるためにこの村までござったんや。
そうして源丞内や村のみんなが見守る
なかで泉の水を飲んでみて、

「まさしく酒じゃ、これ源丞内。これ
は正に神さまのおぼしめし。親孝行のお
前への気持ちで天に通じたのじゃ。そう
だ、この地を養老と名付けよう。源丞内、
お前がこの地を治めよ」
といわした。

「とんでもございませぬ。私などとて
もとても……」

と源丞内はことわったんやけど

「お前が父親を思う気持ちで治めれば
良い」

といわした。

そうして、帝は、年号も養老と改めや
したんや。まあ、この泉は養老公園の中
にある養老神社のわきにある菊水の泉や
といわれちよるわなも。

そうそう、養老神社も源丞内が開いた
んやて。

直江なおえの地蔵さま



直江なおえのお寺の南の方に、小さなお地蔵

さまが、ひとつポツンと立っとなるやろ。

これから話すのは、その小さなお地蔵さまにまつわる、とても不思議なお話なんや。

むかし、むかしのことやった。直江に、

それはお金持ちの家があった。何十人も奉公人が仕えとって、大きな蔵がいくつもあるようなとこやった。

そこに、ひとりの番頭ばんとうさんがおった。

大変な忠義者で、主人からとてもかわいがられておったんや。

ある日のことやった。番頭さんは、いつものように、飼っとる牛たちに食べさせたる草を刈りに、近くにある蛇池へびいけとい

う小さな池へ出かけた。

さあ、きょうも、がんばって草を刈ってやろ、と番頭さんははりきっておった。そして、しばらく草を刈つとると、足もとで小さな悲鳴ひめいが聞こえたんや。

「痛いよー」

もちろん、声を出してしゃべったわけではないが、番頭さんが驚いて見ると、どうも草と一緒に小さな蛇の頭まで切り落としてしまつたんや。こらー、えらいことや。白蛇や。ということ、番頭さんの顔から見る見るうちに血の気が引いていったんや。

「ああ、なんてことしてしまつたんやろ。蛇にすまんこと、してしもうた。ど



うか、このワシをゆるいとくれ」

番頭さんは、二つに切れてしまった小さな蛇に、何度も手を合わせとったんや。すると、突然、なぜかはわからんが、急に水が飲みたてたまらんようになった。

それで、蛇池のほとりまで歩くと、池の水を手ですくって飲んだんや。すると、どうやろう。今度はお腹が痛なつてしまったんや。痛くて痛くて、たまらんかった。

あまりの痛さに、もう死にそうやった。意識がだんだん薄れていく中で、番頭さんは、さつき殺してしまったあわれな蛇のことを考えとった。

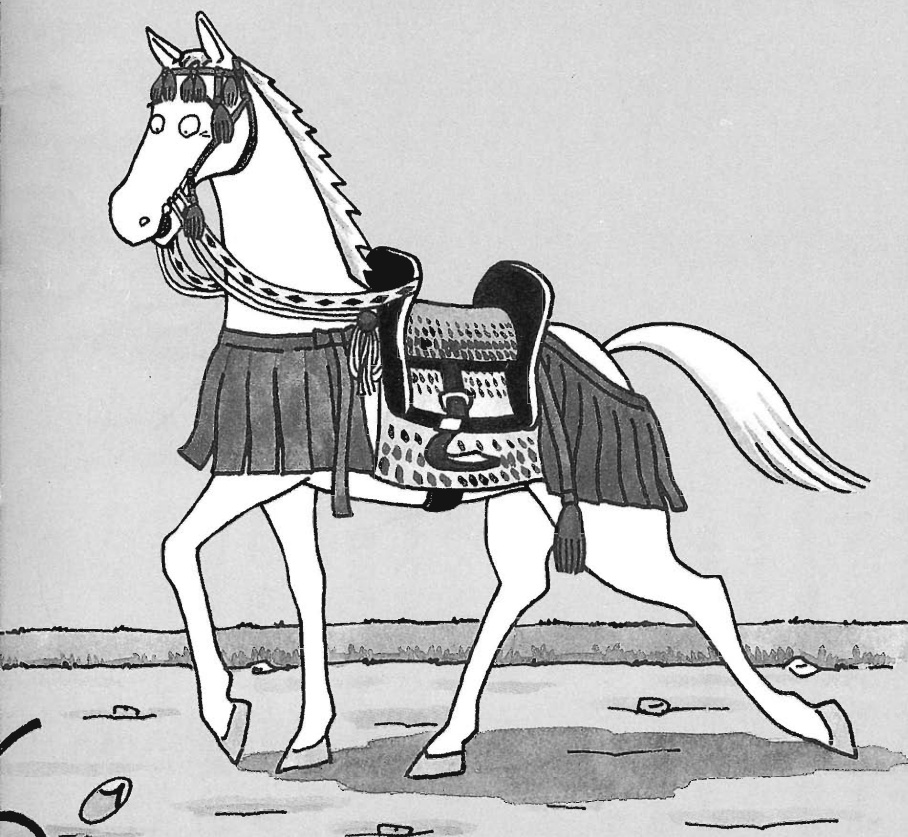
水を飲もうと出てきたのに、ひとりのおっちょこちよいのために、首を切られてしまったんや。もう、水も飲むことができなくなった。それで、きつと苦しんだるんやな、と思つた。

「悪かつたな、本当に悪いことをしたな。もし自分が死んだら、逆にたくさん苦しがつとる人を助けて、この罪の償いをしよう」

とうとう番頭さんは、死んでしまった。それを知った主人は、忠義者やった番頭さんをあわれんで、小さなお地蔵さまを建ててやつたいうことや。

今でも、その小さなお地蔵さまの左端に、いったソラ豆をまいて、「どうか、この豆の芽が出るまでは、〇〇さんを病気にしないでください」と願いをかけると、不思議なことなんやが、首から上の部分なら、どこでも病気になるんいうことや。

久々美雄彦神社



苦しいときの神だのみ、信じるものは
すくわれる、——そういつてよういうわ
な。いっくら文明が進んだって。

ましてや、それが、私たちの先輩の、
おっとさん、おっかさん、おじいちゃん、
おばあちゃん、そのまた……といった、
むかしむかしのこともなれば、頼りに
なるのは神様しかあらへん。

この久々美雄彦神社は、まさに、そん
なとき頼りになるありがたあー神様や。

むかし、むかし、沢田・和田・山村・二
又・乙坂を治める殿様がいたりやあた。

この殿様は乗馬がうまいことで、とて
も有名やった。そして、下町の乙坂から
上町の沢田まで、馬に乗って出かけるの
が日課やった。

乙坂・二又・山村・和田までたどり着
き、いよいよ沢田にやってくる。ところ

が、和田まではあんばようやってくるんやが、上町の沢田町でちゃんと馬から落ちてしまうのや。

次の日も、また次の日も、どうしても沢田では馬から落ってまわつせる。乗馬の名手やのに、こう馬から落おつるのは、おかしい。いや、今は、落つても、軽いケガですんだるが、そのうちに大ケガして、生命まで落としてしまわしては、大変なことになる。

そこで、沢田・和田・山村・二又・乙坂の総そうじがきま氏神様である久々美雄彦神社の神様に「どうか、乙坂から沢田まで馬から落ちんようにしちよくれんさい」とお願いをしたんや。そうするとさいが、神様は、私を、今

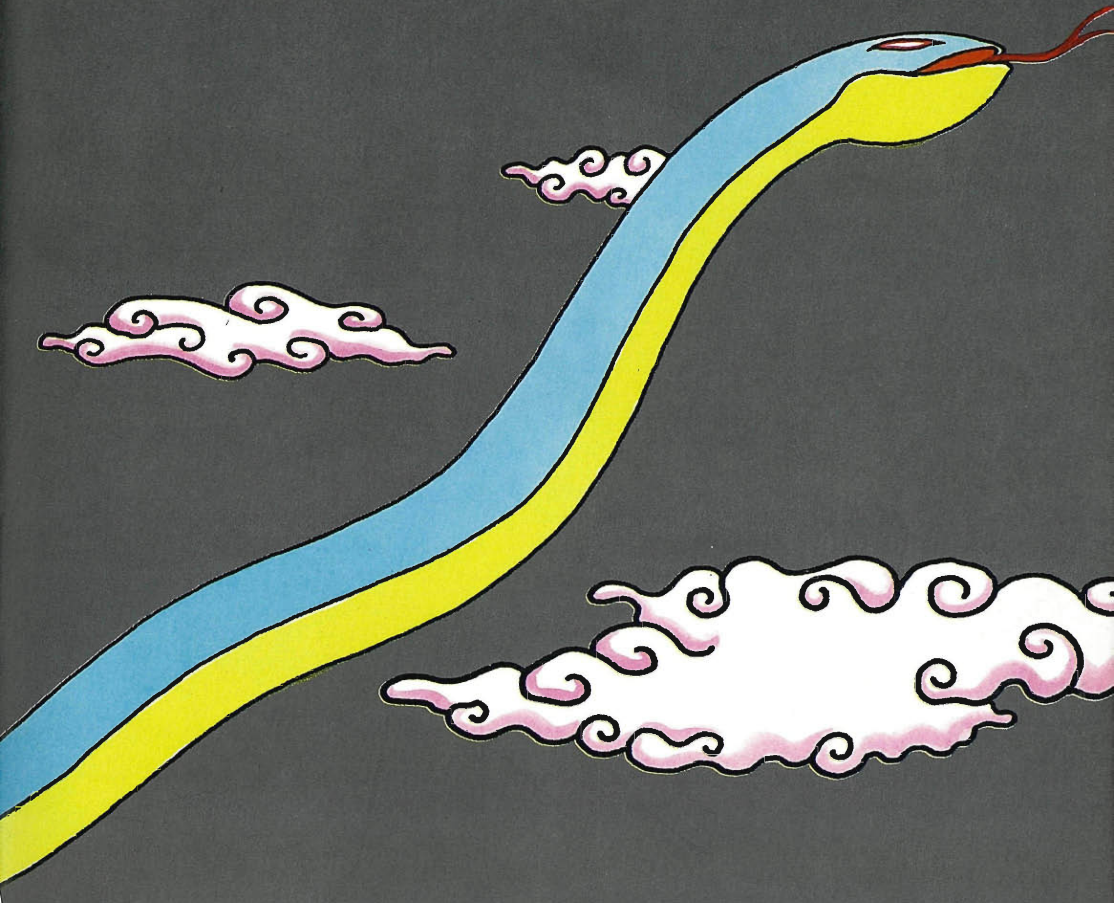
祀まつつてある場所よりも、もつと高い所に祀りなおせば、もう馬から落ちることもなくなるでしようといわしたんやと。

殿様はさつそく、神様のいわした通り、高い所に移しなおさした。

次の日、殿様は、内心、ドキドキしながら馬に乗り、乙坂・二又・山村・和田までやってきなさった。いよいよ沢田や。神様のいわれた通り高い所にお祀りしたものの、内心は、おそがいわなも。沢田に入ると、殿様は一段と慎重しんちょうなたづなさばきを心がけてござった。

大丈夫や。落ちいせん。無事、到着や。このことからいっぺんも馬から落ちんさったことはあらへんげな。





小栗栖神社 おぐるすじんじや

むかし、むかし、小栗栖おぐるすの神様は南宮神社に住んでおらしたげな。仮のすまいというのではのう、故ゆゑあつてここに住んだりやあた。

日本には春・夏・秋・冬と四季の変化があつてとても暮らしやすいんやが、ときとして、梅雨のときがあつたり、台風が来たりと、骨の折れるときもある。

ちようど折も折、南宮神社は大雨に見舞まわれてしまったげな。

小栗栖の神様は充分、気をつけていりやあたけど、うっかり流されてしまったんやて。室原むろはらというところまで。

びっくりしたのは室原に住む人々じゃ。私んたは神様に、いろいろなお願いができるので、たいそう嬉しいけど、このま

ま、ここにおとどめしておいては南宮の神様が困りんさるやろうで、もとの場所へおかえししなくてはと、南宮神社へもっていったげな。

ところが、予想に反して、小栗栖の神様は、

「私は室原の方がよい。室原は住み心地がよさそうだ。おまえたちも、とても心がやさしい。だから、私はおまえたちの役にたちたい、どうか、もう一度室原へ、私を帰してくれないか」と。

こうして、お祀りしたのが、小栗栖神社というわけや。

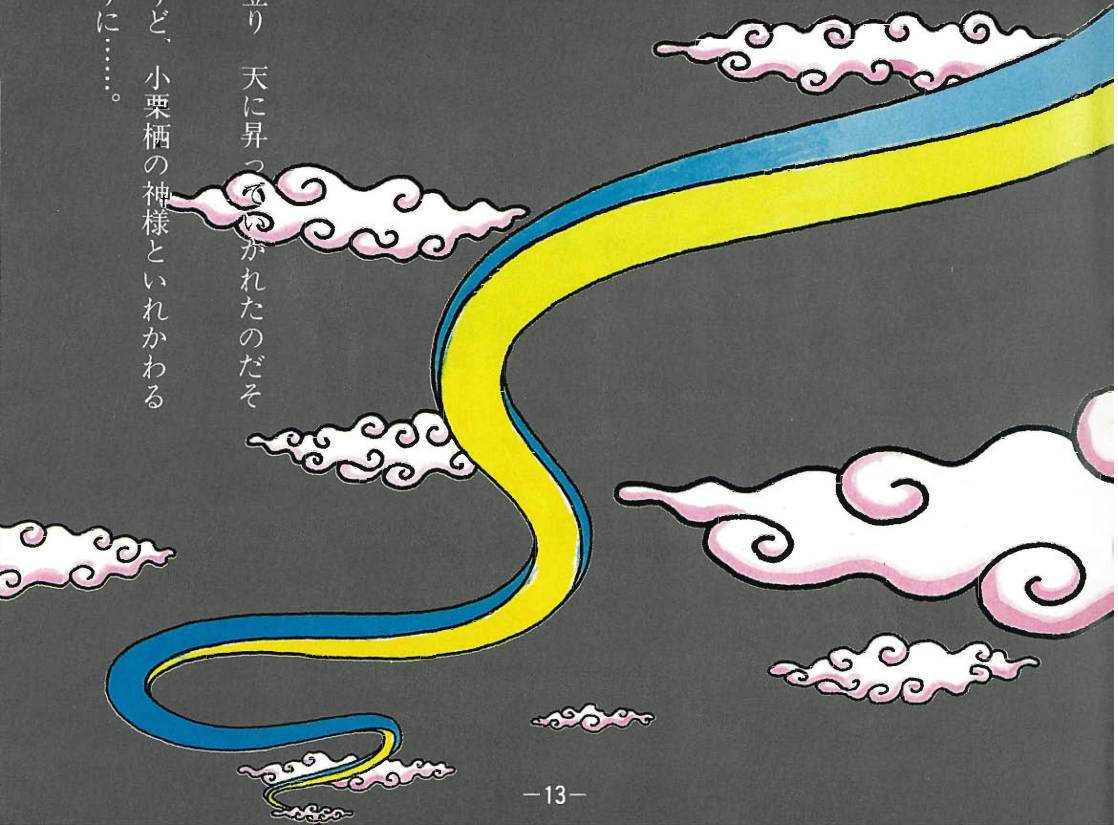
また、ひとつ不思議なことがあつたげな。

この神社の裏の池に、長い年月、大蛇だいじやが住んどったげな。昔から蛇は神様のおつかいだとかいわれちよるんやが……

この大蛇、あるとき、池からでて、杉

の木に登り 天に昇つていかれたのだそう
うな。

ちょうど、小栗栖の神様といれかわる
かのように……。





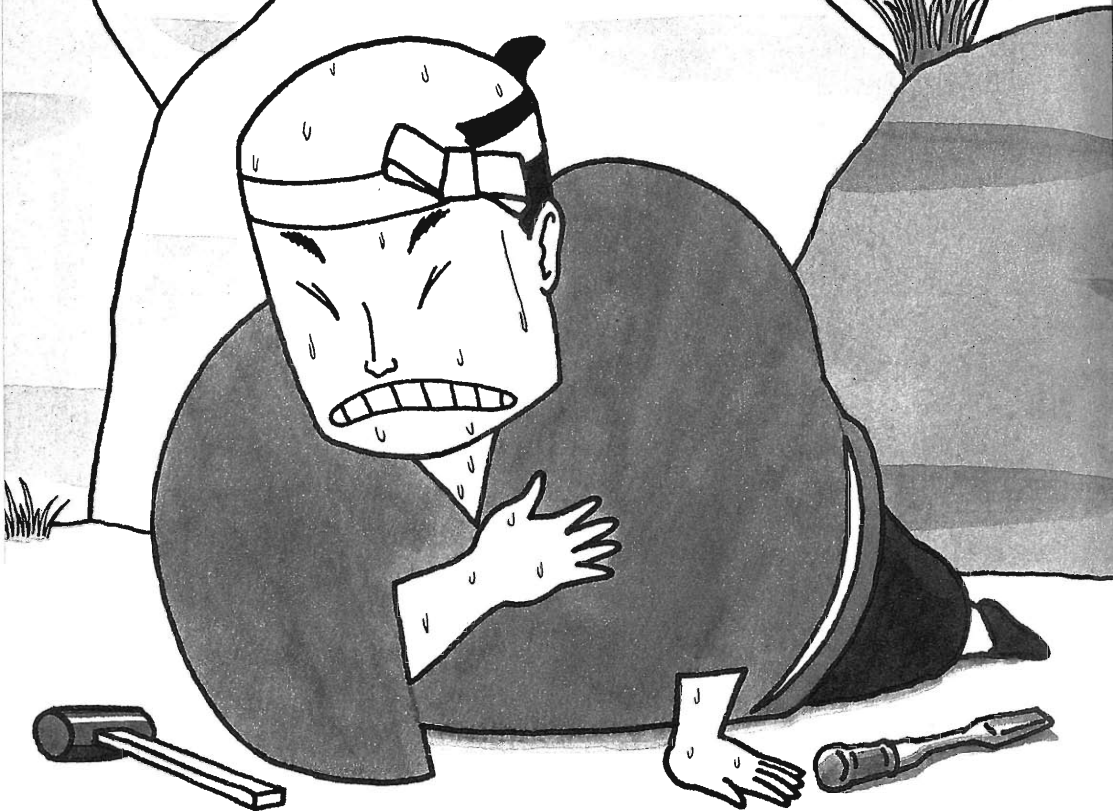
石仏

いし ほとけ

むかしむかしのこと、日吉の北野の東にあった池で、一体の石仏が見つかりました。

そこで人々は、この石仏をおまつりすることにし、ひとりの石屋にたのんで、ほこらを作るようお願いしました。

石屋は、どんなほこらにするか、さんざん迷ったあげく、一枚岩をくり抜いて、その中に石仏を入れようと考えました。くる日もくる日も石屋は、のみひとつを手に岩を少しずつ削っていきましました。そして、とうとうでき上がりました。



さて、石仏を中に入れようとしたところ、どうしたことか、くり抜いた穴が小さいのです。どうも、石屋は寸法を測り間違えたりしいのです。何日も時間をかけてきたのにこの結果で、とうとう石屋は腹を立ててしまいました。そして、こともあろうに、石仏の背中あたりのをのみで削り始めました。

何ということをするのでしょうか。そのうち、どこからともなく、うなり声が聞こえてきました。石仏の顔も多少歪ゆがんだように見えました。

石屋はどうも、何も気がつかなかったようで、仕事を続けていました。すると、やたら体中が熱くなってきました。背中の方では、寒けもしてきました。

とうとう石屋は熱のために倒れてしまいました。そして、三日三晩、高熱になされ続けました。こうして自分が死に

そんな目にあっているのは、やはり、あの石仏を削ってしまったからだ、とやっと気がついた石屋は、ふとんの中で必死に祈りました。

「ナンマングブ、ナンマングブ…。わしのしたことを、どうかゆるしてください」

やがて、熱も下がって、元気なもとの体に戻ることができました。さっそく石屋は、新しくほこらを作り直すことにしました。

こうして、日吉の北野の東にあった池から見つかった石仏は、村のはずれの立派なほこらの中で、村の人たちをあたたかく守ってくれることになりました。

それ以来、この石仏を拝むと、子供のおこりやまいがたちどころに直るということ、多くの人が訪れるようになったということです。

ナンマングブ

ナンマングブ

ナンマングブ

ナンマングブ

ナンマングブ



専念寺 せんねんじ

今でこそ、専念寺付近は家や商店街がたち並び随分とにぎやかな町となったが、今をさかのぼること三百年ほど前は、信じられんほど静かな村やった。

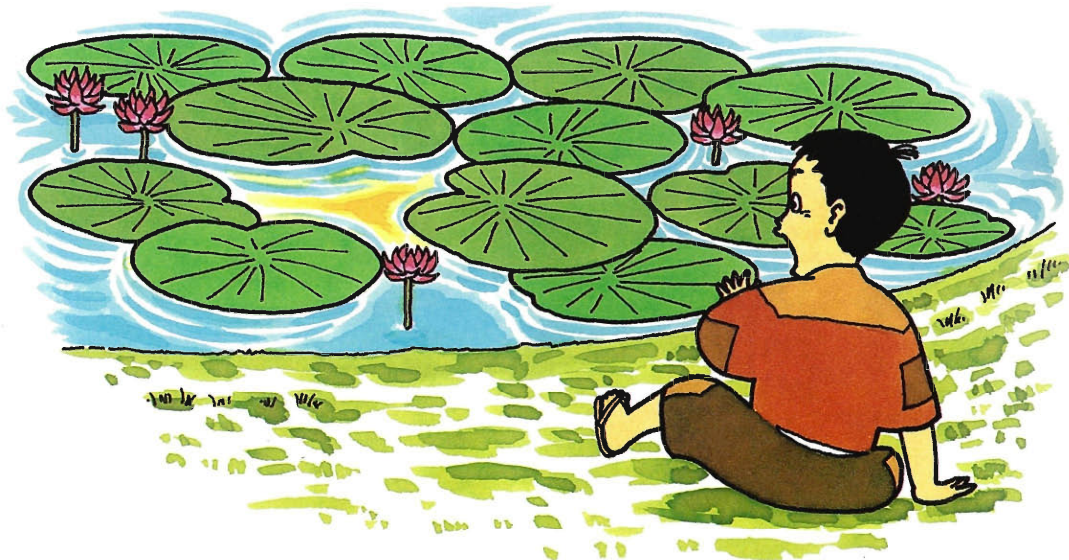
むかし、このあたり一帯はハス池となつとった。夏ともなると、白や赤の美しい花を咲かせて、それはそれは見事なハス池やったげな。

このハスの花を見るために、やぐやぐ隣り村からおおぜいの人々がたずねてくるほどやったんやて。

ある日のこと、村の若者が、ハス池でハスの花を見ながら、休んどったんやわするとハスの葉の影に何やらピカピカ光るもんが……。

「うん、気のせいかな、水面が反射しておるのかな。」と、そのときは、そのまま帰ってしまいました。

家に帰っても何とこのう気になって落ち



着かへん。そうや、まっぺん行ってみよ
まい。

朝、若者は、またハス池へ行ってみま
した。今咲いたばかりのハスの花の赤が
目にまぶしいほどやった。

池に近づいてよく見ると、やっぱり昨
日と同じ場所がピカピカと光つとるんや。
輝きは、昨日よりも一段と、増したようや。

若者はおそぎやあけどハスの葉をおし
のけて水の中へ手を入れてみたんや。手
に何か固いものがあつた。さらに手を
深く入れ、その光るものを持ちあげ水面
まで引きあげたんや。

そうするとさいが……それは金色に輝
くアミダ像だつたんやて。若者はアミダ
像を、ハスの葉を一枚抜きとり、その上
に置き、両手をあわせて拝んだんやわ。
それから、近くにあつたお寺へ、その
アミダ像をもって行かした。

この寺こそが専念寺なんや。
この若者は、やがて立派になりやあて
出世さしたと。



山猫のお六

養老山中の奥深くに、タテ岩という大きな岩がそびえ立っています。そのタテ岩の横には、まっ黒な口を無気味にあげたほら穴があつて、その昔、ここには山猫のお六と呼ばれた、ひとりの女泥棒が隠れ住んでいました。

お六は、大垣あたりの村に出没しては、たくさんのお金銀などを盗んでいました。そして、恐ろしいことに、逃げ帰る途中、追っ手に後をつけられると、そのことごとくを殺していたそうです。

そんなある日のことです。いつものように、お六が盗んできた荷物をかついで足早に歩いていると、どこからともなく人の気配けはいがしてきます。

もし誰かに後をつけられているとした

ら、もうとつくに気がついたはずなのに……。やはり、誰かに見つめられているような気がして仕方ありません。

お六は、急に不安な気持ちになつて、隠れ家のあるほら穴に向つてかけ出しました。

ほら穴に着くと、様子はいつもと変わりなく、さっきまで感じていた人の気配も、もう消えていました。と同時に、お六はとても身体がだるくなつて、立つていられなくなりました。へたへたとその場に座り込むと、やがて氣を失つてしまいました。

どのくらい氣を失つていたのでしょうか……。お六が目を覚ますと、ほら穴の入口にひとりの若者が立っていました。美

しい顔立ちと姿は、とてもこの世の物とは思えません。服装からすると、かなり身分の高い人だと思われます。

びつくりして、お六が起き上がろうとすると、その若者が言いました。

「おまえがお六か？ 私は近江の国から、おまえに会いにやってきた。といっても、別におまえを退治しようというのではない。ただ、おまえと二人きりで話があったのだ」

お六は、声を出そうとしましたが、なぜか一言もしゃべれませんでした。すると…

「無理にしゃべろうとせずともよい。心の中で思うだけで、私にはおまえが言いたいことを瞬時に知ることができるのだ」

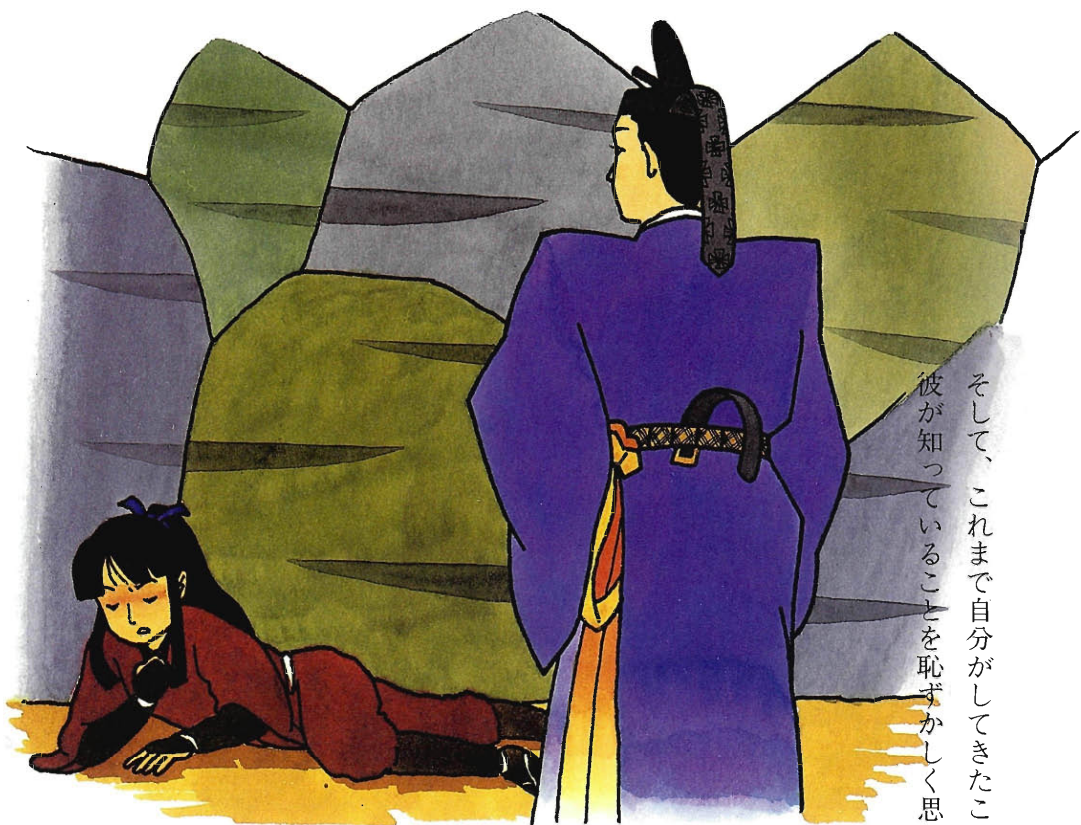
その若者の声は、お六の心の奥底まで浸み込むような響きを持っていました。

「おまえは、これまで人の物を盗んで生きてきた。そのうえ、何人もの人間を殺してきた。だから当然、その罰を受けねばならないが、それは私の仕事ではない。私はおまえに、あるひとつのことを教えにきたのだ。それは、人を愛する心というものだ」

お六は、この若者の言うことが理解できませんでした。人を憎み、人をねたむことしか知らないで、だから誰からも愛されることも、誰を愛することもない、不幸な女だったからです。

お六は、いつも他人に対して感じていた憎悪がこの若者に対しては、まったくないのが不思議でした。そればかりでなく、この美しい若者に、今まで感じたことのない新しい感情が芽ばえていくことに、自分自身で動揺していました。

この若者をいとおしいと思いました。



そして、これまで自分がしてきたことを、
彼が知っていることを恥ずかしく思いま

した。そして、いつの間にか、お六は泣
いていました。

やがて、まばゆい光がまたたくと、そ
の若者の姿は見えなくなりました。そし
て、一匹の白蛇がほら穴の奥へ消えてい
きました。

涙で自分の頬が濡れているのにハッと
して、お六は眠りから覚めました。今ま
で自分は起きているものと思っていたの
ですが、すべては夢だったようです。

その後、お六はその姿をプツリと消
してしまいました。ただ、近江の国の尼
寺に、ひとりのちよつと変わった尼僧が
いるというような風の便りがありました
が、それが彼女なのかどうかは定かでは
ありません。そして、いつの間にか、お
六という名前も忘れ去られてしまったと
いうことです。

しぶなしかや



養老山の裏側、上石津の緑の森公園から、少し南へすすむと、右手の小高いところにお寺の門がのぞまれます。しぶなしかやの民話が伝わる唯願寺です。

この寺に明慶という若い坊さんが住んどった。

ある年、明慶は京都へ修行にいつてその帰り道、瀬田の大橋にさしかかると、ひとりのきれいな娘に出あつたんやて。

おお、きれいなむすめじゃな。

と思つてそのまま通りすぎようとする
と、そのむすめは、

「もし、旅のお坊さま。あなたのいかれるところへ、どうかわたくしもいっしょにおつれください。」

と声をかけられたんや。明慶はおどろいて、

「せっかくですがそれはなりません。そなたには親も兄弟もありません。心配をかけないよう、早くお帰りなさい。」

と、さすと、

「いえ、わたくしには親も兄弟もありません。ですから、どうぞ、わたくしを

いっしょにおつれください。」

と涙ながらにたのみました。

かわいそうに思つた明慶は、それならばと、自分の寺へむすめをつれてもどりんさつたんや。

そして、そのむすめをよめさんにしてなかよくくらすことになつたんやて。

いく日かすぎ、女は赤ん坊を身ごもつたんや。

やがて、いよいよ、子どもが生まれる日がきた。女は、

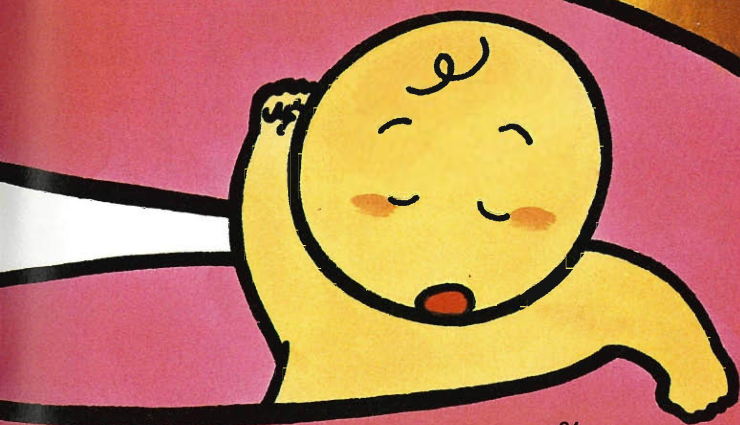
「子どもが生まれるまでは、決して産室をのぞかないようにしてください。お願いですよ。」

といわした。明慶は、

「よし、わかつた、わかつた。けつしてのぞきはしないから、とにかく元気で丈夫なあかんぼうを生んでおくれ。」

とやくそくした。

ところが、見るなといわれると見たい
のが人情ちゆうもんやわなも。明慶が窓
のすきまから中をのぞくときいが――





「ありや、妻^{つま}がおらへん。な、なんだ、あかんぼうがへびにまかれちよるぞ。」

なんと、大きな蛇が、あかんぼうを中にとぐろをまいて苦しんどらっせるんやわ。

おどろいた明慶はその場に腰をぬかし

てしまった。

しばらくして、まるまると太ったかわい
い男のあかんぼうをだいて女があらわ
れたんや。そして、明慶にいいんさった。

「あれほど見ないでくださいとお願い
したのに、見られては、もうここにとど
まることはできません。きょうをかぎり
においとまをしますが、どうかあかんぼ
うだけはだいに育ててください。」

これを聞いて明慶は、

「やくそくをやぶったのは、わたしが
悪かった。どうかゆるしてくれ。しかし、
そなたにいかれてはあかんぼうが育たぬ。
なんとか思いとどまってはくれないか。」

とたのました。女は、

「あかんぼうのことならご心配はいり
ません。わたしがここへきたときに、カ
ヤの実をまいておきました。いま、たく
さんの実をつけています。あの実をあま

くて、しぶがないから、すりつぶして乳
にしてください。」

といって、その日から姿を消してしま
わした。

明慶が庭にでてみると、いつの間にか
大きなカヤの木が、たくさんの実をつけ
とったんや。

それから、明慶は、あかんぼうがおな
かをすかせるときいが、カヤの実をすり
つぶして、それをあたえてしとねたんや。

そのカヤの実で男の子はりっぱにしと
なって、たいへんえらい坊さんになっ
んやて。

このことがあってから、乳が出なくて
困っている人が、このカヤの木を拝むと
乳がよく出るようになったと伝えられ
るんや。



はっぴやくびくに

八百比丘尼と

勢至の立岩

せいし



むかしむかし、まつとむかし、ある所に、おっ父さんと、おっ母さんが住んだった。兄さまと姉さまと、弟と妹も。

ある夜、おっ父さんが都へ出かけて、帰ってきんさった。ええ気分で、ハナうたなんかうたつてござった。ほうーして、家のもんを集めて、みやげをわたしたあとで：

「あんなあ、これはなんでも龍宮城からもらつてきた人魚の肉やいうことや、食べるとさいが、大変なことになるで、カメにしまつとくで、みても、さわっても、だちかんぞ、えか。」

そういつて、人魚の肉だというもんをカメんなかへしまつてまわした。ほーして、おっ父さんの話をなんでもか聞いたあとで、みんな、ねむつてまいったんやわ。

あくる日のことや、いちばん下の娘が『おっ父さんは、見たらあかん、いわしたけど、見るだけやったら、だまつちよら、わつからへんわ』

そう思つてカメのなかから人魚の肉を出したんや。

『食べたら大変なことになるけど、かぎかぐだけならええやら』

と思つて、かぎをかいだんや。いままでかいだことのないええかぎがするんや。おいしそうで、うっとりしてまった妹は、

『なめるだけならええやら』

そう思つてなめたんやて。とつてもええ味や。そして、つつい、

『少しぎしなら、食べてもわっからへんやら』

と思つて、ついに人魚の肉を食べてまった。

するとどうやら。なんや知らんけど、ええ気持ちや。顔がぼーおとなつてまつて、雲の上、歩いちよるようで、とにかくええ気持ちや。なにがどうなつたんやわけがわからん。そーしていつんまにか妹はねてまったんやて。

えーと、えーとねちよつて気づいたら、七日も八日もたつとつたんや。

もちろん、家のもんは心配してあつまつてきちよる。おつ父さんは、娘が人魚の肉を食べたらしいことは知つちよる。

やつと目を覚ました娘に、おこらしとしたが、娘の顔を見てびっくりしてまった。なんと、娘の顔はどこかちがう。とっても美しいし、なんか、こうとてもけだかいかんじや。きつと人魚の肉のせいやと思つたんや。

そうしてなん日かなにごとものう過ぎた。いや、そう思えただけや。この娘、年ごとにきれいになつた。あんまりきれいなもんやで、村のもんはもとより、都からもいっぱい縁談がきたんやて。

そのたんびに娘は、

「私は、嫁にまいるわけにはまいりません。」

となんべんでもことわるもんやで親も



あきらめてまわした。そのうちに五年・十年と月日がたった。それでも娘は、年をとらへん。長い髪はしつとりとつやつやしとるし、顔のつやもええ。胸も腰もはりがあつて、そりやあいにおなごやった。

そうするときが、村の人んたがうわさをしだあた。

「あの娘は、ちよっとおかしんやないか。化けもんやぞ。」

ついに娘はいたたまれのうなつて、家を出て尼さんにならした。

そうしてえーつとの間^ま生きとらしたそうや。百年ぐらいかて。ちがうて、何百年も生きやしたそうや。何でも八百年も生きやしたんやと。ほんで八百比丘^{はっぴゃくびく}尼と言われちよるんや。

この八百比丘尼はやがて若狭の国のお寺へ行かしたそうやが、あるとき大きな岩を山の上まで運ばしと思つて背負つて登つとつたそうや。

ところが、びわ湖が見えたたん、ふーと気がゆるんでまつて、背負えんようになつたんやと。ほんでそのまま、大きな岩を置いていかしたんやげな。

その大きな岩が勢至の立岩なんやげな。

高田の莊福寺は臨濟宗のお寺で、貞治二年（一二六二）に建てられたもんや。境内の隅に松の木があり、木のもとに、高さ二尺（六十センチ）ぐらいの石がある。頭の部分が刃物で割られたように鋭く、黒っぽい石で姥切石と呼ばれちよるんや……。

むかし、むかし、京都東福寺の下僧で紀正徹なる男がおった。寺での務めは書記、それで徹書記と呼ばれておった。

なかなかの風流人でもあり、歌を詠むときには清嚴といった。

ある日、清嚴は心をこめて歌をつくったんやが、この歌の内容が反政府的であると、おとがめを受け、都を追われてまった。

そうして、たどり着いたのが、莊嚴寺やったんや。寺にござった間もよく歌を詠んでりやあたんやが……。

姥切石

うばきりいし



あるとき、この姥石のわきで女が、も
だえて、死んでまわした。

女の靈魂が石に移ったのか、石は人の
肌のように温かくなり、夜ともなると、
一晚中声を出^あてあたかも、すすり泣^なち
よるようやったげな。

この話を聞いた正徹は、さっそく、

おふちにはあふことかたき姥石の

さこそ肌のつめたかるらん

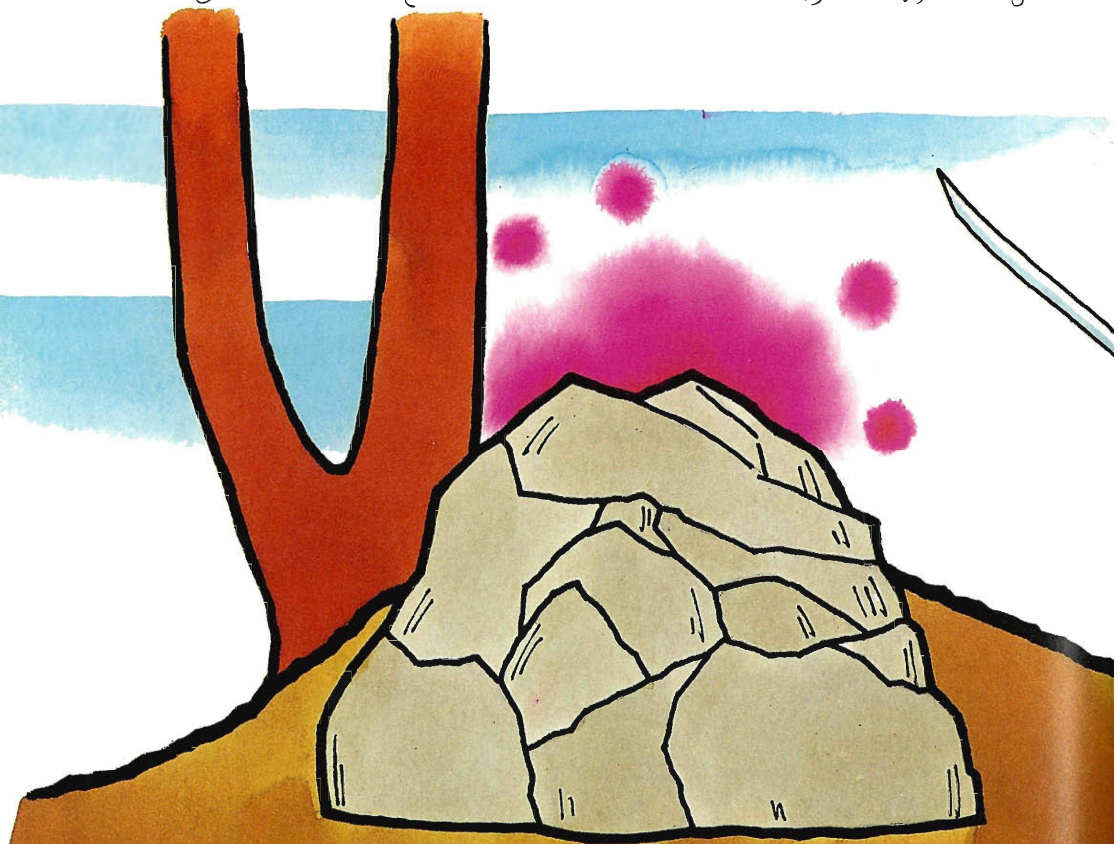
と歌を詠み、刀剣で石に向かつて、

「迷わず成仏せよ。」と喝をいれた。

それ以来、石は冷たくなり、声もたて
なくなった。

人呼んで姥切石。

その後、正徹は帰京を許され、京都へ
帰らしたそうやが、その後、どうならし
たかは、誰も知らんわなも。



勢至の 一つ火

勢至村、此所に勢至山光堂寺、天平宝
字年中之建立。其の後三百年を経て破滅
す。西山七坊の中にて寺家二十四本これ
有り。今にその屋敷ども、これあり。

現在日吉神社裏に寺跡と思われる台地
が残つて居り礎石三筒を数える。

むかし、勢至村に、とても仲の良い夫
婦が住んどったんや。

夫の職業は巡査。朝も早から、夜は遅
まで、実によく働く巡査やつた。

そんなある日のこと、この巡査に、一つ
の命令がくだったんや。それは、勢至村に
あらわれる人玉を監視せよというもののやつ
たんや。そんな気味の悪いこと、イヤや
と思つても、命令とあつては断わるわけ
にはあかんわなも。うわさの人玉は柏尾
寺の千駄地蔵のある千人塚から浮かび出
ては、勢至村へ飛び、勢至寺の廃墟のあ
たりをさまよい、やがて、竜泉寺・柏尾・

津屋など焼き払われた多芸七坊のあつた
村々をめぐりめぐつて千人塚へ歸つては
消えるといわれとったんや。

村人はこれを勢至の一つ火といつてた
いへんおそががつとつた。

というのは、この人玉に出あつたが最
後、近親のものが一兩日の中に死んでま
うといわれとつたからや。

いくらお役目とはいえ、大へんな役を
いいつけられたと、内心巡査はおだやか
やあらへん。

監視を始めて一・二週間は、人玉の火
の字もあらわれなんだ。巡査は、「これは、
オレさまを恐れて人玉もよう出てこんの
だな。」と思つとつた。

が、しかし、ついに、ある夜、人玉を見
てしまったんや。見てしまったものはおも
う取り消すこともできへん。

イヤな想いを胸にだきながら、監視疲
れで、ぐったりした身をもてあましながら

ら、うちへ急いだ。
そして、ついに、翌日、奥さんは帰ら
ぬ人となってまわしたげな。



柏尾^{かしわお}にある柏尾寺は、多芸七坊^{たぎひちぼう}のひとつで、深い山奥にあるわなも。

今でも、うつそうとしげった森の奥深くに寺跡は、残つちより、東海自然歩道のコースになつとるがなも。

むかし、むかし、この柏尾の近くに、それはそれは気持のやさしい若いお坊さんが住んどりやあたんやて。将来は、りっぱなお坊さんになるんやと、毎日、毎日、苦しい修業をされちよった。

そんなある日のこと、このお坊さんは大悲観音を背中に負つて、柏尾までやつてきんさつた。

「ずいぶんと歩いたので、ちよつと疲れたな。少し休もう。」と神社の前でひと休み。

しかし、大悲観音を背中にくくりつけたままでは、ゆつくりと休むことができ

柏尾^{かしわお}の観音^{かんのん}



いせん。

目の前にあった大きな石の上に置こうとさしたんやが、観音様をこのまま、地べたに置いたのではもったいない。何か敷きもの、座ぶとんになるようなものはないかなと、あたりを見まわした。

ちようにいい具合に柏の木の葉がきわにあったのでそれを石の上に敷いて、観音様をその上に置かした。

ホツとしたのと、疲れとで、ついウトウトとしてしまひんさったんや。

気がつくと、あたりは、すでにうすぐろうなつとつた。

「これは、いけない。先を急がなくては。」と身づくろいをし、石の上に置いた観音様を持ち上げようとしたんや。

そうするとさいが、どうしたんやろ、観音様はおもなつてまって、ありつたけの力を出して、観音様を動かさしと思っ

ても、どうしようもあらへん。お坊さんは困り果てて、その場に座りこんでまわしたんや。

「そうか、動かないものを無理に動かすこともない。観音様に雨や風があたりんように、しやあしやあええんや。このまま、ここに置いておいても大丈夫や。」と思いついたんやて。

観音様のためにお堂を建てるんや。

コツコツと建てはじめ、どうにか、それらしきお堂ができあがつたんや。

すると、どこから聞きつけてくるのか、少しずつ、人が集まりはじめ、み仏さまを拝^{おが}んでは帰ってかつせるのや。

そうして、小さかったお堂も、大きゅうなり、やがては大伽藍^{だいがらん}の霊場となり、多いにさかえたんや。

若かつたお坊さんも、りっぱな大僧上となりんさつた。

現在の柏尾村の地名の由来は、このみ
仏さまのために、柏の木の葉を山の尾に
敷いたことから、こう呼ばれるようにな
ったげな。





養老町には柏尾寺にまつわる話がたあとに残されちよる。

ほんで、柏尾寺のこと話してみよかなも。

文化年間の記録によるときいが……

「多芸郡柏尾村。ここに柏尾山柏尾寺。天平宝子年中に建立。大伽藍なり。その後、七百年に及んで破滅す。西山七坊の内にて寺家二四本これあり、今に据石・五輪石塔共、数多これあり」と書いたり、新撰美濃志には「柏尾は勢至の南にあり。柏尾山観音寺跡、多芸七坊の一所なりしが、今は廃頽す」とある。

永禄五年（一五六二）織田信長に焼き討ちされた。

現在、柏尾廃寺は神明神社下の平地にある。



明治三十年三月のことや。

柏尾に安田笹市なる人物が住んどった。

ある日のこと、安田氏は、柏尾寺の御

堂の跡には梵鐘^{ぼんしゅう}が埋まっちより、正月元

旦の未明に金の鶏^{きん}が鳴く^{にどり}という話を耳にしたんや。

この人ならずとも、そうと聞けば、やつぱり、掘り出して、この目で確かめてみたいと思うのが人の常や。

安田氏は、ちゃっと、村の人んたを集め、村のお許しが出たところで、梵鐘^{ぼんしゅう}の発掘を始めたんや。

堂の庭を掘り下げること地下十数尺。

だがお目あての梵鐘は出てこうへん。

ところが、かわりに出てきたのが、なんと石仏。それも一つや二つではのうて、いっぱいある。

この石仏は信長の時代に焼き討ちにされた人んたの霊をまつたんやろう。

安らかに眠ってまうために、ここに丘を作り、台座を設けて、石仏様んたをまつろまいか。

ということで、できあがったのが、柏尾の千躰地藏なんや。

柏尾寺廃跡のすぐ近くにある存徳寺の記録にも、柏尾寺は、天正五年四月中旬織田信長の焼き討ちにあつて失うなつたと書いたる。



小畑^{おばた}の千人塚

澄き^すとおるような秋空の下、子供たちが手をつないで輪になっていきます。輪の中には、おかっぱ頭の女の子が、両手でしっかりと顔をおおって、しゃがんでいます。女の子の名前は、さよ。この春、七つになったばかりです。

突然、子供たちの歌がやんだかと思うと、くもの子を散らすように、それぞれ思い思いの方向にかけていきました。

「もう、いいかい？」

「……」

誰ひとりとして、返事がありません。

「もう、いいかい？」

かくれんぼの鬼は、さつきよりも大きな声で叫びましたが、やはり返事がありません。それでも、さよは、目隠しをしてい

るもみじのような手はずしませんでした。

どのくらい時間がたったのでしょうか……

「もう、いいかい？」

かわいそうに、最後はもう涙声になってしまいました。グショグショになった両手をそとはずすと、あたりは、もううす暗くなっています。

さよは、ゆっくりと立ち上がりました。人の気配は、感じられません。それでも、さよは、みんなが隠れていそうなところを捜^{さが}しはじめました。

ふと気がつくと、小畑^{おばた}の千人塚の前に立っていました。さよは、自分を置き去りにして帰ってしまった友だちのことに少し腹を立てて、また涙がこみ上げてきました。



…と、その時、千人塚の近くの松の木が、ガサガサと音を立てたのです。さよは、きつと誰かが隠れているに違いないと思いました。

今度は逆に、自分が驚かしてやろうと考えて、松の木の枝をポキリと一本折って、息を殺して物音のした場所へと近づいていきました。

◇ ◇ ◇

その時のことを、さよは、はっきりと覚えていないのです。ただ、ひどく怖い物を見て、息が止まるほど驚いたことと、ただただ、やみくもに走って、家にとどり着いた時は裸足で、口も聞けなかったこと、そして手には、松の枝を持っていた事しか…。

帰りが遅いさよのことを案じていた大人たちは、さよにやつぎばやに、いろいろな質問をしましたが、さよは、貝のように口を閉ざしたままです。そして、夜にな

ると、激しい腹痛を訴えるばかりでした。

さよは、うなされてから三日目の晩、不思議な夢を見ました。その晩は、ずっと続いていた腹痛もなぜかおさまっていました。さよの枕元に、よろいよろいで身を固めた戦国武士が何人も立っているのです。その姿は、数日前、さよが千人塚の松の木で見たものと同じでした。

彼らの中の一人が、重い口を開きました。「おぬし、松の枝を折ったであろう」さよは、恐ろしくてガタガタと震えていました。

「我らは、遠い昔、関ヶ原の合戦において、無念の最期をとげた。その折、我らの血は、地中に浸み込み、それをあの松の木の根が吸い上げた。つまり、あの松は我らの身体の一部であるといってもよいのだ。毎夜、我らは未練の残るこの世に成仏できずに現われてしまうのだ。どうか、我らの霊を安らかに弔ってもら

いたい。そして、さよ…、折った松の枝を千人塚に返してほしい…。くれぐれも、頼んだぞ…」と言うと、フツと、まるでろうそくの炎のように彼らは、夜の闇の中に消えていきました。

さよの話聞いた大人たちも、それがさよの作り話のようには思えませんでした。なぜなら、村には昔から千人塚にまつわる怪談がいくつもあったからです。

早々に、塚のそばにほこらを建て、お地蔵さまをおまつりしました。朝な夕な、千人塚のかたわらを通る村人たちは、お地蔵さまに手を合わせるのです。もちろん、その中に、すっかり元気になったさよの姿があった事は、言うまでもありません。

※小畑の千人塚にまつわる話は、今も伝えられています。がさよの話は作者の創作です。

逆さあし さか

へ お正月っあん お正月っあん

どこまで ござった

山の上まで ござった

竹の先に みそつけて

ねぶり ねぶり ござった



こんなうた、知つちよりんさるか？
むかしは、お正月っあんが近づくとうよう
うたつたもんや。これから話す源義朝 みなもとのよしとも
の話は、お正月っあんの近づいた、さぶ
ーい、さぶーい日の話や……。

源義朝ちゆう人を知つちよりんさるか？
源義経 みなもとのよしつねのお父さんや。ほれ、牛若丸のこ
とや、義経いうのは。つまり、牛若丸の
お父さんが源義朝や。

平治元年（一一五九年）、一二月二七日
のことや。京都の戦いに負けてまった義
朝んたは、雪の中を八人ぎしで東の方へ
逃げとつたんや。途中、十三歳の息子、
頼朝 よりともさえ、雪で見えんようになってまっ
て、なんぎしながら、青墓までたどりつ
いたんやわ。宿 やどの長者、大炊 おおいの娘、延寿 えんじゆ
は、義朝との間に夜叉御前という娘をも
うけちよつたので、その縁を頼つて来た

んやわ。

義朝は、こゝでどうぞして源氏をまあいっぺん盛り返えやし、とかんこうしとったんや。けど、世の中は、平家の天下や。義朝が隠れちよると知った村人んたのなかには、このことを、平家におせえて、ほうびをもらわし、と思つたもんもおつたんや。ほんで、人々が集まつて来た。その時や、馬が、ドドドと走つて来て、村の人んたをけちらしてやつて来たんや。ほうして、馬の上では武将が、

「我こそは、源義朝なりー！もはや、これまで。ここに自害するぞ！みなもの、よく見届けよーっ！」

と叫んだんや。そうして、自分の顔をきざんだあとで、腹を十文字に切ったんや。ほして馬から落つてしまった。見事な最後やった。

なに？義朝は死んでまったかて。違う

て。身代りや、身代り。死んでまったのは、義朝のけらいで佐渡部大輔重成ゆうんや。まんだ二九歳の若さやった。

義朝らは、やつとこさの思いで津屋川の所、その頃は田跡川たごろといっちよったそいうやけどー、そこまでたどりついたんや。そこで榎えによろいをかけて、弁当を食べやしと思つたんやが、はしがあらへんだ。ほんで、きわにあつた、あしあしの木を折つて、はしのかわりにして食べたんや。食べ終つた義朝は、あしの枝を逆さに、地べたに刺してこういわしたんや。

「もし、このあしあしが芽を出せば、源氏の世がくることもあるだろう。」

そうして、追手の火のあがるなか、舟に乗つて尾張の国の内海うみに向つて逃げてかしたげな。内海ちゅうのは、海水浴なんかでよう行く、あの内海のことやて。

そうして、あしは枝が根づいて、なんと葉が逆さになって出てきたそうや。それで、むかしの人んたは、その木のことを「逆さあし」と呼んだんやて。

今、飯の木ちゅうところにある「あし塚」というんは、その「逆さあし」を植しかえたもんや。また、すぐわきに、ここから義朝が舟で逃げたといわれちよる橋がある。そんでこの橋のことを「源氏橋」と呼んじよる。また、義朝がよろいをかけたといわれちよる榎も残っちよる。

「あしの木」は、「よしの木」とも呼ばっちよるから、「あし塚」も「よし塚」もおんなしこっちゃなも。



ふなつけ 船附のみなと

牧田川と揖斐川が重なつとるあたりに
船附ふなつけというところがあるわな。なんで船
附いうんか知つとりんさるか？

そうや。船がつくからや。船を付ける
とも書くし、船が着くとも書くわなも。
そう、むかしはこのあたりは湊みなととして栄
えたんや。

なんでも慶長一五年（一六一〇年）に掟
書が与えられとるそうや。その頃の牧田
川は、伊勢湾と琵琶湖の方へ、また、日
本海に適する大事な所やったそうや。そ
の頃の船附はにぎやかな湊やったやろな
も。ほんとうに栄えとつたんやろなも。
ほんでもついこなあだまで、船が行き来
しとった湊やった。にぎやかなもんやつ
た。今はあんまし、面影が残つとらんけ

ど、ほんとうにええもんやった。私わたくしらの
娘の頃は、船で嫁入よめいりしたもんや。

白無垢むくに角隠つのかくしの嫁さん。お仲人ちゆうにんさん。

そして嫁入り道具が乗った船が続くんや。

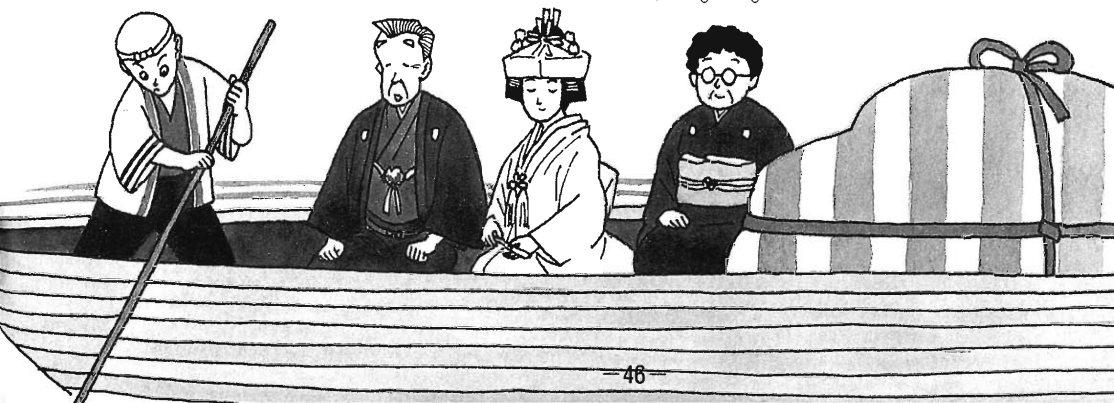
船頭さんがろをこぐ。ギイー、ギイー、

船が揺れる。嫁さんははずかしいもんで
うつぶく……ええもんや。嫁入りや、め
でえたあことは、なるだけ朝のうちから
始めるわなも。

嫁さんの行列が村人中入つてござると
もう大騒ぎや。子供んたがぎょうさん寄
つて来て、両手を広げて、はやしたてる
んや。

へ嫁さん 嫁さん 菓子 おくれ

菓子 くれな 通せんぼ



そうするときが、嫁入の行列の中から、菓子をまかつせるんや。そんで、子供んたが拾う。

むかしは、結婚式場やら、ホテルなんかあらへん。嫁入はみんなむこさんの家でやったもんや。そんで嫁入のある家には、ひと嫁さんを見やし思つて集まつてくるんや。近所はもちろん、隣の村からもやつてござる。ここでも菓子まかつせる。そんなもんで嫁入言つたら、みんなが楽しみにしとるんやなも。

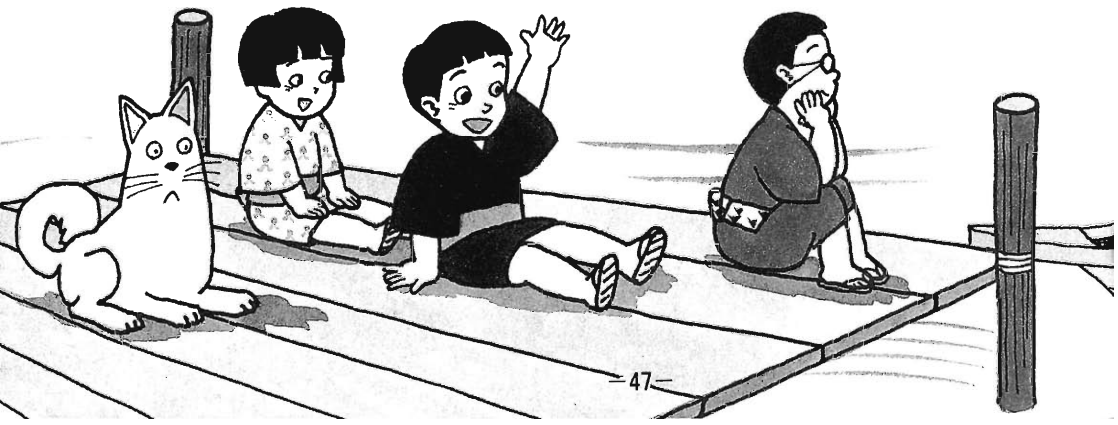
嫁入ばつかやあらへん。船を使うのは、いろんなもん売りに来るわな。とくにうれしんは、お正月のごつつおや、着るもんやなんかや。ま、村とまちを結ぶありがたあもんやつたわなも、船は。

そう言やこんなこともあつた。船附には。大雨と大風でえりやあこつちつた。忘れもせえへん。昭和三四年の八月一二

日から一四日のことや。

思い出あてもおそぎやあこつちや。牧田川が根^ね古^こ地の^{こじ}とこで切れてまつて、そりやあ大^{てふ}変^{へん}やつた。ここらあたりはみんな水びたしや。逃げるんも船や。牛を連れて逃げた人^{ひと}んたもいたよ。なんしよ、家族^{かぞ}と同じ牛や。他のもんはあきらめても、牛を見殺すことはでけえへんのやわなも。あんときは力を合わせてみんなでがんばつたもんや。私も^{わち}たき^{たき}だ^だし^しを手伝つたよ。たきだしつてなんやでか？ ご飯をたいて持つてくこつちやよ。おにぎりなんかにして。

避難しとる人んとこへ、差し入れに行くのも船やわなも。この時、見舞い品で一番、ありがたあのは何やろ？ そりやあ、おにぎりやふとんもありがたあ。そやけど一番大事なんは、水や。水。皮肉なもんやわなも、水はいっぱやああるの



に。けど、きたなて飲めえへん。ほんで、
何よりきれいな水が一番や。——とにかく
くあんなおそぎやあこと、まあごめんや
わなも。

いろんなもん乗せて船が入って来たり
出てったりしとるの見るのはええもんや
った。いつの頃か船が出入りせんようにな
ってまった。さみしいもんやわなも、
何でもかでもむかしのもんがのうなつて
まうのは……。

多岐神社



お百姓さんにとって、くる日もくる日
も、晴れの日ばかりかちゅうことは、とて
も困ることなんや。なんでかいうと、米
や農作物が育てへん。花だつて水やらな
枯れてまうやろ。枯れてまうては、食べ
るもんがのうなつてまう。こうなったら
最後、お手あげや。

大正の初めころのことや。一か月以上も雨が降らなんだんやて。田んぼや、畑は、かれかれになつてまつた。井戸水もあらへん。飲み水にも困るようになった。こくなつたら、どうしようもあらへん。雨ごいしても雨は降れへんし、お百姓さんたあーは、頭を痛めとつた。このままでは、おまんまどころか、ひえあがつてまうと。そこで、お百姓さんや村人は毎晩、毎晩集まつては、ない知恵を絞つとつた。ひとりの村人が、どうやろ、こうしたらと、ある考えをみんなの前で話し始めた。

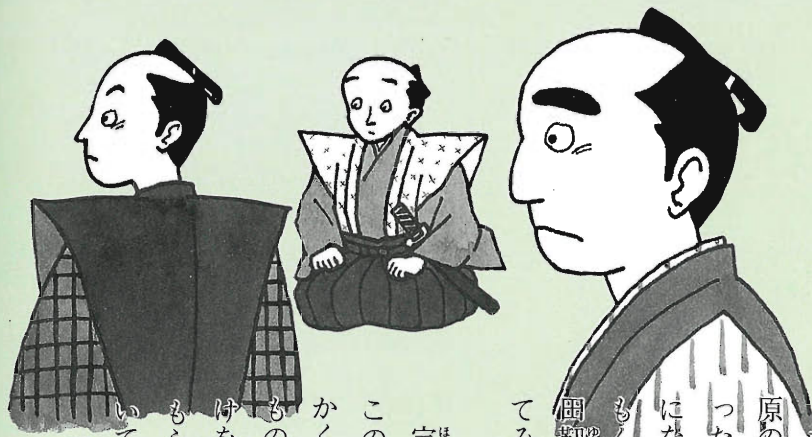
その考えとは、

「牧田川の砂を運んでくるんや、それで、田んぼや畑にまいて、新しく作りなおすんや。あつこの砂は、水をよう含んだるし、作物が育つかもしれへん……。」と。

農民たちは、わらをもつかむ思いで、その意見に同意したんや。なんもせんとこのまんまいるより、ええ。早速、砂を運ぶ作業にとりかかった。そーすると、どうやろ、砂の上には、早稲、中稲、晩稲の三つの稲が芽を出した。お百姓さんも村の人んたもびつくりするやら、喜ぶやら。これは神さまが、見捨てずにいてくれたんや。有りがたい、有りがたいと、村の鎮守の神様にお参りするようになったんやて。それが多岐神社^{たき}や。

多岐神社は中世美濃国三宮といった。社伝によると和銅年間(七〇八―七二四)の創建で、郡内で一番古い神社なんや。今でも年二回、春と秋に祭りがあり、春は作物の無事を祈り、秋は収穫を感謝するんや。

薩摩義士の宝曆治水



むかしむかし、まっとむかし、千本松原のあたりは大雨が降るとさいが大変や。木曾川・長良川・揖斐川がひとつになって、あふれてまって、なんぎしたもんや。そんな村人んたを救ったのが平間頼負・率いる薩摩義士や。その話をしてみようかなも。

宝曆になるちよつと前の頃、毎年毎年このあたりは大洪水やったんやて。とにかくひでえもんで村人んたが生きてく気ものうなつとつた。そのたんびに幕府に助けを訴えとつたんやが、ちつとも聞いてもらええへん。ところがついに願いが聞いてもらえることになったんや。

一七五三年(宝曆三年)二月二五日、

薩摩藩に、木曾川の治水工事を「大名お手伝い普請」として命令さしたんや。「大名お手伝い普請」いうのはな、工事のかんとくやなんかは幕府がやり、その命令を受けた藩が工事することや。費用なんかもほとんどその藩が引き受けなかん。命令を受けた薩摩藩主・島津年重、以下困り切つてまわした。

なんしよ藩は、赤字つづきで、ばく大な借金があつた。これ以上借金を増やすなんて、とてもとても……しかも木曾川のある美濃は遠い。

しかし、何で薩摩藩に命令が下ったんやろ。その頃、薩摩藩は、加賀百万石に次いで大きい藩やいわれとつた。琉球との貿易やなんかでもうかつとつて、力の



さあ、困ったと、薩摩藩では、みんなが相談しとった。命令にそむくことはできえへんし、金もあらへん。中には、こうなったら幕府と戦おう、いうもんも多かったな。そんな藩士らをまとめたんが、財政担当勝手方掛^{かたがた}・平田靱負^{かたがた}やった。靱負はみんなに向ってこういわしたげな。

命令をこばめば戦いになり、藩はほろ



ある藩や思われとったんや、幕府に。そんで幕府にさからわんように工事を命令さしたんやわ。工事にばく大なお金を使うと藩の力も弱なるわなも。それに地元の人んたを雇うもんで、地元の人んたは太よろこびや、手間賃もらえもんで。それにみんなの願いを聞いたることもできる。幕府にとっては願ったり叶ったりや。

びるだろう。たとえ他の藩のことでも苦しんでいる人たちのために生命^{いのち}がけで、この工事を成功させよう。それが薩摩藩の名譽を守ることになるだろう。どんなことがあっても資金をそろえて、工事を完成しよう。

この説とくにみんなうなずき、命令をうけることになったんや。平田靱負を総奉行に、合わせて九四七人、いよいよ出発や。

平田総奉行ら一行は、宝暦四年一月、故郷を旅立ち、途中、大阪に立ちより、なんぎしながら工費の数万両をくめんとて、木曾川の所へ付いたんや。

やっとこさの思いで、現地へたどりついて、みんなはびっくりさしたわなも。特に木曾川が長良川といっしょになり、さらに揖斐川へ落ちて激流になつとる、



油島^{あぶらじま}締切工事の場所は、ほんとうにおそぎやあわなも。うず巻いて、ほんとうにのみ込まれそうな流れや。

平田総奉行は工事区域を四つに分け、一の手から順番に進めてった。工事を始めたのは宝曆^{ほうれき}四年二月二七日やった。

そうして雪解水や梅雨で増水してまっ
て五月二二日にいったん中止。水が減った九月二二日にまた工事を始めたんやわ。刀を持てばさっそうとした薩摩藩士もくわやすきを手にしては、なかなか思うようにならへん。それにおくにのことも思うように通じん。それに幕府の役人からは、さんざんののしられたりして、薩摩藩士たちは腹のにえくりかえるくらい
の思いやった。それでもしんぼうして、工事にはげんどった。

とにかくえらい目にあいながらも、みんなようがんばったんやが、幕府の

役人のつらいしうちや、工事があんばよ
ういかん責任を取ったりで三九人もの藩
士が切腹したんやわ。

そうやって、忍びがたきを忍び、耐え
がたきを耐え、やつとこさのことで油島
締切工事が完成したんやわ。この時、宝
曆五年三月二八日。五月二二日までに幕
府の検分も終って引きわたしや。何とこ
んなむつかしい大工事が、わずか一カ
月あまりで、やってまったんや。機械が
進んどん今でも考えられんこっちゃわな
も。まあ、それだけ大変やったいうこつ
ちや。

油島締切工事が完成したときに、薩摩
から千本もの松の苗を取り寄せて植えや
したんやわ。その時松の根元に藩士の涙
が雨のように落ったということや。きつ
とつらかったことや、死んでった仲間の



ことなんかを思い出したんやろ。

さあ、工事も終ってまって、みんな薩摩へ帰らっせる。平田靱負は、工事中に切腹さった人五一人、病死者三三人も出し、たくさんさんの費用を使ったこと——工事の費用は、二〇万両の土方商人からの借金、藩内からの借金や寄付、増税から集められたんやけど、幕府が薩摩藩へわたさしたのは一万両にもならなんだげな。——そんな責任を感じとらしたのやろ。大牧村の本小屋^{もとこや}で切腹さしてまわした。五二歳やった。死ぬまぎわにこんな辞世の歌を残さした。

住みなれし 里も今さら 名残りにて
立ちぞ わずらう 美濃の大牧

平田家の系図によるとさいが靱負は病

気で死んだと書いたったげな。切腹となるとお家断絶となるからやわなも。明治時代に書き写された桑名の海蔵寺^{かいぞうじ}の過去帳には割腹と書いたるわなも。

この偉大な薩摩義士についてはいつの間にか忘れられてまった。明治時代に新政府はオランダの技師に木曾川の改修工事をたのんだんや。この工事は、一九〇〇年(明治三十三年)に終ったんや。この工事を進めてくうちに、桑名郡多度町の西田喜兵衛という人が薩摩藩士のことを知って、広く世間にたたえる運動を起こしたんや。

そうして、千本松原のところに「宝暦治水碑」を、輪之内町^{おおくれがわ}大藪^{おおくさ}に「大樽川洗堰^{おおくれがわいせき}碑」を建てることになったんや。

あとがき

この小冊子は、玉泉堂酒造株式会社が会社設立五十周年を迎えた記念事業として、日頃御世話になっている養老町の皆さんに配布するために刊行致しました。

折しも養老町では、町制施行三十周年を迎える事になり、先代社長が初代の町長を務めさせていただいた関係もあり、その意味では時期を得た企画であったと思います。

今後養老町民憲章にうたわれていく様に、先人のたゆまぬ努力によって伸びつづけて、また歴史のある養老町内の企業として社会に奉仕を致したいと思えます。

この小冊子が少しでも私共の町を見直す文化的な活動であるとお考え下されば幸甚です。

『養老むかし話』

発行日———昭和59年11月1日

発行———玉泉堂酒造株式会社

編集———構成 佐久間文雄 絵 田中耕作

文 衣谷 康・松原 容子

倉須 牛太・本島由季子

制作———中京印刷工業株式会社

☎(0582) 37-5211(代)





